

# 荒木山通信

2019年12月

第7号

荒木山の古墳  
を顕彰する会

分かる唯一の古墳であろう。  
古墳の名称が珍しいので  
気になっていた。

この度、真庭市教委の新

谷主幹から現地の図面が届

き、古墳を含む一帯の小字

名が「そふづぶろ」である

ことが判明した。なお、表

記の仕方は次のとおり三種

である。「ソフヅ風呂」が

十二筆、「そふづぶろ」が

七筆、「添水風呂」が三筆

であった。

また、かつて古墳の近く

に住んでいた人たちから

「そうずぶろ」と言つてい

たとの証言もある。「う

と「ろ」は判別が難しく、

筆字となるとどちらにも読

めることから、命名の際間

違つたものと思われる。

さて、首長墳が荒木山に

続いてこの地に築かれたの

は何故か。次の代には盆地

の中央で、荒木山近くに立

て築かれた全長四九mの前

方後円墳である。昭和六十

年頃で、古墳時代をは

じめとした古代史ファンが

全国の古代史ファンを  
北房に呼びませんか

北房には、古墳、遺跡が

多數あります。大変残念

なことに、どこに何がある

のか、地元の方でさえよく

知らないというのが実情で

はないでしょうか。三年程

前に北房に帰ってきた私も

同じです。

今年の五月、小殿に行つ

てみました。地元の方に尋

ねても、小殿遺跡という名

前さえご存じありませんで

した。また、立一号墳を見

ようと、二人の地元の年配

の方に尋ねたのですが、こ

こでも古墳があることさえ

ご存じありませんでした。

その後、英賀廃寺へ行くの

も一苦労でした。

もし、「北房の古墳・遺

跡マップ」や道案内板があ

れば、それを頼りに誰でも

行けます。たとえそこには

煙しかなくとも、説明看板

があれば、説明文を読みな

がら、遙か昔の風景を想像

できます。

全国には、古墳時代をは

じめとした古代史ファンが

築かれて、現地の説明

看板等が欲しいものです。



(立一号墳：後円部)

「昭和三〇年代の私たちの生活や使っている道具等とあまり違っていないのではあります」

・・（その後の高度経済成長期を経て短期間にどんどん変わっていきますが）

中でも鳥取県の青谷上地寺遺跡の木工品は素晴らしい、人間国宝に「これほどものは作れない」と言わしめています。「昔の人はすごい！」と皆が声をあげました。弥生人のものづくりのすごさ・素晴らしさを感じた一時間でした。

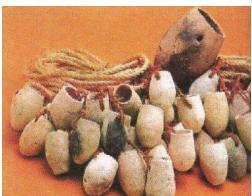


古代(弥生)人は、すごい！

十一月二十三日(土)、なかつい陣屋で荒木山古墳を顕彰する会の役員研修を行いました。



(木製農具：直柄や曲柄の又鋤)



(漁撈具：たこつぼ)



(木製のスプーンとフォーク)



(レーダー探査)

北房公民館講座として市内最古級の荒木山古墳のナゾに迫る調査が、昨年度の東塚に続き西塚古墳で、十一月一日(日)の一週間に渡って行われました。この調査は、受講生自らが市教委と同志社大学との支援を受けて、最先端の機器で古墳の形状や内部構造を探査したものです。

北房公民館講座として市内最古級の荒木山古墳のナゾに迫る調査が、昨年度の東塚に続き西塚古墳で、十一月一日(日)の一週間に渡って行われました。この調査は、受講生自らが市教委と同志社大学との支援を受けて、最先端の機器で古墳の形状や内部構造を探査したものです。

## 石室がまだ残る？ 荒木山古墳のナゾ解きへ 一步前進か？ ↗ 西塚調査完了！



(磁気探査)

測量機器を覗く姿は板についていましたし、ソリに積んだ重いレーダー照射機器を、古墳形状に沿つて適度な速度を維持しながら数人で移動するチームワークは絶妙でした。「習うより慣れよ」の実際です。

鉄製の副葬品を探す磁気探査は調査一番の魅力らしく、機器を手放さない受講生の姿も面白い。通常音「ピッピッピッピッピ」が、強く速い異常音「ピピビビビ」に変わる瞬間、「おっ？」と声が出て反応のある一点に

(奥田健治)

スムーズに進みました。受講生の多くは昨年からで、老眼が進み数値の読みにくさを気にしなければ、本的に語られました。

プロジェクトで遺跡からの出土品等を映され、古代の稻作・漁労や狩猟・衣服や住居・祭祀や音楽等、古代人の暮らしの様子を具体的に語られました。

何度も照射。思わず近寄る津村准教授（調査責任者）や他の受講生。「埋葬物は浅そうだ。ここぞとばかり手で上土を少し取り除く。すると……。結晶片岩の板状石片で囲まれた四辺の真ん中に鉄心の入ったコンクリート製の三角点（国土調査の基準点）が現れる。「なんだ！」とみんながつかり。西塚古墳の後円部がにぎやかな笑い声に包まれながら調査は無理なく進められ、完了しました。

調査終了に当たり津村准教授からレーダー探査の分析途中の画面を提示されて

「盗掘された石室の下に、大きな埋葬空間が残っています。そのまま放置すると墳頂の崩壊が進み、取り返しがつかなくなります。早期な学術調査の必要がありそうです。」と非常に興味深くワクワクする話を聞きました。トレーンチ調査が計画されると荒木山古墳のナゾ解きはさらに一步前進することでしょう。

## 亥どしの話

荒木山の古墳を顕彰する会

顧問 戸村 彰孝

今年は和暦の令和元年亥どし、西暦二〇一九年であつた。戦後世代は西暦を好むが、年配の者は西暦に愛着をもつ。来年は十二支のトツ子、今年は最終ランナーの亥だから、バトンタッチの師走に亥にまつわる話をしようと思つて筆をとる。

### 一、昭和時代

今年還暦を迎えた人は、昭和三十四年亥どしの生まれ。この年は、皇太子と正田美智子さんのご成婚で國中がミッキー・ブームに沸いたものだ。つい先月、上水田の郡神社を訪ねる機会があつた。本殿は、鎌倉時代以降たびたび改築されてきたといえられ、回廊の上には古色の絵馬が架けられている。基壇の四方には



(郡神社の十二支の彫刻：亥)

三、昔むかしの話  
欽明天皇十六年（五五五）今から千五百年ほどの昔、ト朝廷は最高実力者の蘇我（ヤガマ）は、亥どしであった。

白猪屯倉の本拠地について  
一部考古学者からの異

物に喩えることを十二生肖という。  
酉（とり）馬（うま）未（みの）申（みの）巳（巳）蛇（へび）  
卯（うさぎ）兔（うさぎ）辰（みの）龍（りゆう）午（うま）牛（うし）  
酉（とり）雞（けい）戌（いぬ）犬（いぬ）亥（いぬ）猪（いのしし）  
これは日本で、ベトナムでは水牛や猫・山羊などが登場するそ�である。

十二支の動物を刻んだ見事な彫刻が並ぶ。北房町史によれば天正時代の作で桃山風の様式という。日光東照宮の彫刻に勝るとも見られる逸品である。十二支を動物に喩えることを十二生肖という。

朝廷直轄地（稻穀目めを派遣、吉備の国に白猪屯倉を設置した。百年ほど前から列島中西部に地名を冠した屯倉（穀倉をもつてゆくと、どうやら古墳時代「五穀の豊穣を御歳（みのせ）神に祈願する祭祀（ほじょうやく）として供えた」（古語拾遺）故事に由来があるらしいと分かつてきた。もう一つの特徴は、渡来人の子孫の力をかりて成人の戸籍（丁籍）をつくり、土地と人を直接支配下に入れる方式を初めてとつたことであろう。

造山・作山古墳をつくつた五世紀前半の吉備は、や

マト朝廷に比肩する勢力を誇っていたが、吉備の反乱の度重なる失敗を境に劣勢

に追い込まれてゆく。白猪屯倉の強引な設置もその一

つの象徴と思ってならないのである。



(縄文後期の猪形土製品)

《弘前市》

論はあるが、日本書紀や続日本記の分析から美作國大庭郡に比定する文献史学の主張が有力である。

## 令和元年度 後期の活動



(設置の階段)

員十六名  
・市二名刈  
(柴搔き・草刈)



- 3 -

本年度も荒木山の掃除や整備作業と合わせて、北房公民館講座の「まに大付属ふるさと研究所」の講座に多くの会員が参加しました。  
十一月九日（土）午後  
西塚の柴搔き  
(会員十一名・まに大講座生四名・市二名)  
十一月十六日（土）午後  
西塚の柴搔き・東塚前方部に階段の設置

## 現場に立つ

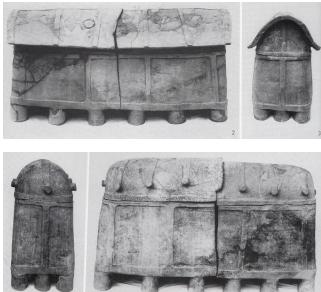
平成三（一九九一）年二月末から約一ヶ月、定北古墳の第一次発掘調査が行われた。

それに先だって、岡山大学考古学研究室から担当者が北房町の教育委員会に来られて、

「考古学研究室は予算が少なく困っている。定北古墳の調査に百万円の資金支援を願いたい。」といつた旨の申し出があった。そこで、

「古墳の調査が終わった段階で、出土品を北房町へ戻す。」

（定北古墳出土の陶棺）



《切妻型》

《龜甲型》

る。

さて、定北古墳の調査が始まること、四基の陶棺のうちの一基には、身と蓋に「記」の字が刻まれているなど、予想を超える成果が得られた。

そんなある日、発掘調査中の定北古墳へ上していくと、調査を担当されていました。

新納泉先生が下りて来られ、「あなたが提唱された『西の明日香村』がいよいよ現実味を帶びてきましたよ。」

唱された『西の明日香村』がいつた旨の質問だが。

「西の明日香村を提唱した先見のある平松さんの質問ですが。」

と答えて下さった。先生の記憶の中で、久松は何時しか平松に変わっていました。

定北古墳調査の後、定東塚・定西塚の発掘調査が数年にわたり行われた。

定古墳群の発掘調査により、大和の王権を支え、飛鳥の都を造った実力者の蘇我氏の勢力が北房へ進出し、吉備国と出雲国に影響を与えたとも考えられ、定古墳群が彼らの数代にわたる墳墓である可能性を秘めていると真剣に考えている。

「西の明日香村が現実味を帶びてきた。」

講演し、「蘇我氏と密接なかかわりのある有力者が北房に居り、吉備を支配下に置いていたのではないか。そ

ういう点からも、当時の歴史を考える上で、北房の地や古墳群の持つ意味は大きい。」

と話された。その際、私は大谷一号墳と定古墳群の被葬者の関連について質問した。新納先生は、

「西の明日香村を提唱した先見のある平松さんの質問ですが。」

と答えて下さった。先生の記憶の中で、久松は何時しか平松に変わっていました。

定北古墳調査の後、定東塚・定西塚の発掘調査が数年にわたり行われた。

（久松秀雄）

## 重要施設を支えた 版築の技法

て遜色ない。」  
と言われています。



（3号陶棺に刻まれていた記の文字）

我が国で最初に建立された寺院は、奈良の明日香村に在る飛鳥寺（法興寺）で、五九六年に蘇我馬子が建てたと言われています。

この建築は、百濟の工人たちによって成されたとされています。猪熊兼勝先生（国立奈良文研）は、平成七（一九九五）年のシンポジュウム「終末期古墳と大谷一号墳」で版築について次のように説明されています。

「版築は両側にワク板を横に立て、その中に柔らかい粘土と乾燥した土を互いに重ね、直径五センチくらいの棒で叩き占めたものです。古墳の場合は板を入れずに、土饅頭型にしていきます。」と。



（郡神社本殿の土壇）

生が  
「大谷一号墳のものと比べて遜色ない。」  
と言われた新納先生もそうした物語を描いておられたのかも知れない。



（飛鳥寺）

（久松秀雄）

郡神社に近接して在ったとされる英賀郡衙や赤茂の英賀廃寺でも版築らしき遺構が指摘されています。なお、総社に在る鬼ノ城の壮大な版築土壘は有名です。このように、七世紀の後葉には、この地方でも最新の土木技術版築が重要施設を支えていたのです。身近なことでは、ため池の築堤で行われた「千本づき」も版築の応用と言えるでしょう。

吉備雅武彦命の御廟跡の伝承がある郡神社の本殿の土壇の版築も立派で、猪熊先